

〔研究ノート〕

開運松原六社参りの役割と展開

来 村 多加史

私が2009年4月に阪南大学へ就任してから18ヶ月あまりの短いお付き合いであったが、前田弘先生のご不幸は、痛恨の出来事として胸に刺さった。ゆっくりお話をする機会もないままに旅立たれたため、先生のことをほとんど知らない。学生を連れてボルネオ島の僻地で植樹をされていることや、徳島県吉野川市の美郷村で棚田の石垣を積んでおられることは、情報として耳に入っていたが、どういう思いをもって活動をしてこられたのか。結局、大切なことを先生ご自身の口からお聞きできずに終わった。ただ、先生が弱者の救済に情熱を注がれていたことはわかる。宮沢賢治の詩のように、困っているものがおれば、救いの手を差し伸べにゆく人であることは、対面して受ける印象で感じた。その心をお聞きして、自分の身体に染み込ませていたら、と思うと、残念でならない。丸い人柄、ほのぼのとした言葉づかいを思い出すと涙が出る。心よりご冥福をお祈りします。

開運松原六社参りの着想

半世紀あまりも人生を続けていると、ときどき情熱にあふれた人に出会う。布忍神社の寺内成仁宮司がその人である。芸術家でもある寺内氏は発想力が実に豊かであり、神社の行事にもさまざまなアイデアを実行されてきた。言葉の芸術家で知られるイチハラヒロコ画伯に依頼して作り、好評を博している「恋みくじ」がその一例である。2011年の正月、支援活動で連れて行った女子学生2人が「人は見かけ」「わたしに落ち度はありません」と、白い紙の中央に太字で縦書きされただけのクジを引いた。何というクジだと驚き、あとでわけを聞けば、そういうカラクリであった。とにかく企画が斬新である。

そういう寺内氏が申の年（2004年）から柴籬神社・阿保神社・屯倉神社・阿麻美許曾神社・我堂八幡宮の5社と連携して始められたのが「開運松原六社参り」である。正月の元旦から15日までの間、それぞれの神社で横に長い絵馬を発行している。その絵馬を500円の初穂料で頂戴し、六社を参拝しながらスタンプを集めて元の神社に戻れば、可愛らしい張り子のエトを授かる、という仕組みである。

寺内氏に直接お話をうかがって、立案にいたる経緯を聞いたところ、発端は忘れもしない1995年1月17日（火）早朝に発生した阪神淡路大震災にあった。そのとき寺内氏は知人を救援するために神戸を訪れ、不思議な光景を目にした。多くの人々が瓦礫の散乱する街路をあてどなく歩いている。歩くのは何かの目的があるのだろうが、その目的地を探せないまま彷徨っているのである。よく知っているはずの近所の地理情報に欠ける人がいかに多いことか。寺内氏は震災で潰れた神戸の街で、この意外な事実を知った。

それから数年たち、またひとつの出来事があった。2002年のことである。5月5日の端午の節句に布忍神社の境内でフリーマーケットを開く企画を立てた。ほどなく近くの高見の里に住む人から出店申し込みの電話がかかった。寺内氏が電話ではなく、直接申し込みにくるよう伝えたところ、なんとその人は40



絵馬と張り子のエト

年あまりもこの町に住みながら、「布忍神社の場所を知らない」と言うのである。寺内氏の脳裏に大震災の光景がフラッシュバックした。そして考えた。もし松原に震災があれば、この人たちも同様にあてどなく町を彷徨うのだろうか。

その翌年、2003年の正月に宮司仲間の新年会でひとつの話が持ち上がった。松原の神社が力を合わせて連合の行事を始めないか、という話であった。そこで白羽の矢が立てられたのが、企画力のある寺内宮司であった。話を預けられた寺内氏は色々と考えた。ちょうどその時期、自身がダイエットとして散歩を続けていたこともあり、神社を歩いて回るスタンプラリーのような企画はどうか、という漠然とした案が浮かんできた。ただ、その後はいたずらに時間が過ぎた。ところが、8月にこの案が一気に具体化した。

例年、夏には授与品屋が神社に注文を取りに来る。正月の破魔矢や絵馬の受注である。そこでひとつの提案があった。「来年は破魔矢に張り子の申をつけてはどうですか」という提案であった。寺内氏の頭の中でスタンプラリーと張り子の十二支が重なった。

こうして固まった六社巡りの企画にキャッチフレーズを付けたい。そう思ってあれこれ考えているうちに、「開運」という文字が浮かんできた。神社ではよく使う熟語であるが、文字をよく見ると、思わず膝を叩く発想が出た。開運の開は「門の向こうに鳥居が見える」景色を思わせる。運は巡るという意味である。つまり、足を運んで扉をひらけば、そこには神社の鳥居がある、という意味をもたせられる。歩いて神社に参り、健康と福を得る。「開運」はそういう企画をみごとに語るキャッチであった。ここに「開運松原六社参り」がスタートした。

2003年の申年から始まった企画は、翌年の酉年には早くも地元浸透した。3年目の戌年には手ごたえを感じさせる出来事があった。六社参りの参拝客が寺内氏に向かって自慢げな顔で、「開運の開は門の向こうに鳥居が見えるという意味ですよ」と教えたのである。ひとつの笑い話になるが、六社参りが地元に着したことを、このとき寺内氏は確信したという。

歩けばおのずと地元の地理がわかる。阪神淡路大震災で彷徨う人々を見た寺内氏の心配は、六社参りを慣行としている参拝者には無用である。仕事や日常生活に追われ、近所を散策するゆとりのない人は、せめて正月だけでも地域を歩き回り、いざというときの情報を拾って行ってもらいたい。それこそが現実的な「福」である。

六社マップの制作と配布

4年目の亥年には参拝者のためにマップを作ろう、という話になった。地元商店街から賛助金を集めて広告媒体にしてもらおう、という話も出た。しかしながら、これにはひとつの問題があった。神社は地域の中で常に公平な立場が求められる。マップの紙面は限られているため、氏子である商店のすべてに声をかけることができない。それでは神社の中立を守れないのでは、という懸念の声がある宮司からあった。もっともな話である。このような現実の問題に直面すれば、おのずと結論は見えてくる。六社参りはお宮任せにせず、地元が率先して支えるべき行事である、という結論である。

阪南大学に就任した年から、私は研究助成課の主催する講演会の講師を務めた。松原市との連携事業では、周辺各地への臨地講座を行った。その講座をサポートをしていたいただいた白石圭二氏と西田敬之氏から六社参りのことを聞かされた。さっそく布忍神社に出かけ、寺内氏に「支援させていただきます」とお約束した。阪南大学は「地域社会の要望と課題に応え、その発展に貢献するという目標を掲げ、社会と積極的に連携し、協力していくとの方針」を謳っている（大学HP）。六社の中央に位置する大学が六社参りを支援しなければ、この標榜は言葉だけに終わろう。そう考えてお約束したのである。

2010年12月に学生6人を連れ、歩いて六社を参拝した。参拝者の大半は1日で六社を巡り、張り子のエトを授かるという。それならば我々も一気に六社を巡り、その距離感や疲労度を確かめなければならない。そういう目的をもって歩いた。朝の8時に河内松原駅に集合し、柴籬神社・阿保神社・屯倉神社

の順に参拝した。三宅神社から布忍神社までの間には阪南大学の南キャンパスがあるため、そこで休憩したのち布忍神社へ向かい、あとは我堂八幡宮・阿麻美許曾神社へと北上して本キャンパスで解散した。時間は15時を過ぎていた。途中の休憩時間を差し引くと、およそ6時間の行程である。

この調査のあと、再度六社を回ってコースを決め、松原市発行の2千5百分の1都市計画図に情報を盛り込み、冊子状の地図にしたのが文末に掲げた図である。これを1000部作成して六社に配布していただいた。本キャンパス正門と南キャンパス通用門の守衛室にも50部ずつを預け、手洗いを借りに来学する参拝者に配るようお願いした。そのようにして2011年1月の六社参りを迎えた。さすがに元旦は同行する学生もいなかったため、私が単独で六社を回り、1月3日には3人の学生を連れて再度歩いた。

六社を巡って感じたことは、掲示物の不足である。さすがに布忍神社は「六社参り」と手書きをした貼紙を掲げているものの、他の神社では、社務所に特別な掲示があるわけでもない。恒例となっているため、地元の参拝者にあえて案内する必要もなかろう、ということであろうか。近鉄南大阪線の河内天美駅・布忍駅・高見ノ里駅・河内松原駅など、最寄りの駅にもポスターや掲示は見当たらない。駅の協力も得られていないようである。これでは他の地域から初めて訪れた参拝者は、どのように参詣してよいのか、皆目見当がつかない。街を歩けば、商店街は大型スーパーマーケットを含めてすべて三が日の休業に入り、シャッター通りとなっている。六社参りを見込んで営業をしている店舗は見当たらない。これが三が日の実状であった。

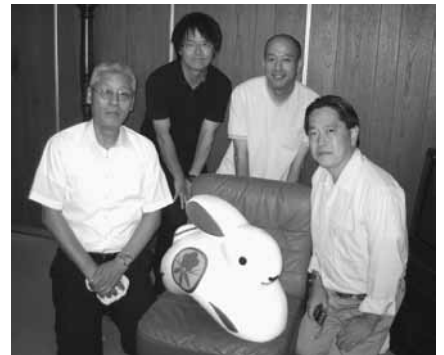
このようなことを寺内氏に申し上げたところ、事情をご存知であった。同時に、我々が作成した地図の冊子が年配の方に不評であったことも告げられた。費用のこともあって単色刷りにしたため、地図のベースと重ねた情報の区別が不鮮明で、なおかつお年寄りには字が小さ過ぎたようである。地図を分割したことも「わかりづらい」という評価の原因であろう。両キャンパスの守衛室で聞いたところ、手洗いを借りに訪れた参拝客はいなかった、とのことであった。キャンパスに配置した地図は用をなさなかったということである。いずれも寂しい結果に終わったが、改善策を立てる情報は得られた。

このような結果を踏まえ、辰年の2012年正月には、A1版一枚物の多色刷りマップを配布する予定である。A1版のポスターも作り、近鉄各駅や公共施設、商店街等に掲示していただくことになった。いずれも阪南大学が費用を支出する。これで「支援します」と申し上げたお約束の一端を果たすことができそうである。また、松原市商店会連合会の光田政志会長にお願いし、六社巡拝路の周辺にある11ヶ所の商店会よりマップ制作に賛助をいただけることになった。地域で六社参りを支える機運の芽生えになればありがたい。

六社参りのモデルコースと松原の文化財

さて、研究ノートとして文章を発表するからには、六社参りが学術的にどう活かせるか、という見通しを提示しておかねばならない。国際観光学部には籍を置く者としては、「観光資源」という世俗の用語をもって、六座の神社とそれらを結ぶ道にある文化財を語ることが求められる。ここでは2010年のマップ作りで提示したモデルコースに沿って、神社の由緒や文化財の価値を紹介し、畏れながら六社参りを観光に活かす道を探りたい。

地図の上で六社の位置を確認すると、そのうちの阿麻美許曾神社・我堂八幡宮・布忍神社を西部3社、屯倉神社・阿保神社・柴籬神社の東部3社として分けることができる。地形的には、西部3社は西



左から寺内宮司・白石氏・西田氏・筆者

除川の旧河道に沿い、東部3社は羽曳野丘陵から瓜破台地へ続く中位段丘の上に並んでいる。歴史地理の方面から見れば、西部3社は下高野街道、東部3社は中高野街道の沿道か近くに位置する。どの視点から見ても、西部3社と東部3社はそれぞれに連帯を感じさせるのである。

しかしながら、西部3社と東部3社との間は遠く隔たり、六社参りもこの距離をいかに縮めるかが課題となる。もっとも、地理的な位置は変えようがない。要は距離を感じさせない工夫が必要なのである。私が初めて布忍神社を訪ねたとき、寺内氏は思わず驚きの声をあげてしまう現状を語られた。屯倉神社から阿麻美許曾神社まで、大和川の土手を延々と歩く参拝者が多いという事実である。寒風の吹きぬける川の土手を歩くのは厳しい。屯倉神社から大和川の土手に出て阿麻美許曾神社へ進む道の距離を測れば、3.3kmもあり、そのうちの大半が土手歩きになる。車道の部分も多く、江戸時代の宝永元年（1704年）に付け替えられた大和川の土手そのものに古い歴史はない。

どうしてそんなところを歩くのか、と寺内氏にお尋ねしたところ、どうやら参拝者が道を知らないらしい。大和川の土手であれば見通しもよく、道も単純である。ただし、参拝者の多くは高齢者であるため、やはりこの道はお勧めできない。そこで歩く道を探ったところ、都合のよいことに気がついた。阪南大学の本キャンパスが両社をつなぐ直線上に位置する。それならば元日からキャンパスを提供して、休憩所に使っていただいたらどうか。という発想が生まれた。

ついでに南キャンパスは使えないものかと位置を探れば、屯倉神社と布忍神社を結ぶ直線に近い。阿麻美許曾神社・我堂八幡宮・布忍神社と巡り、布忍神社から屯倉神社まで頑張って歩けば、あとの屯倉神社・阿保神社・柴籬神社は流れるように歩くことができる。六社参りは絵馬を拝した神社に戻る必要があるのだが、柴籬神社から阿麻美許曾神社へ戻る際に、河内松原駅から河内天美駅までを近鉄電車でショートカットすればよかろう。このコースで最も長い距離を歩く道の途中に南キャンパスがある。つまり、阪南大学の両キャンパスは巡拝を助ける施設として使うことができる。それでは、今仮に阿麻美許曾神社を出発点として、時計回りに六社を巡るモデルコースを紹介しよう。

阿麻美許曾神社は松原市ではなく、約700mの参道とともに大阪市東住吉区に編入されている。景観の上では、大和川が大阪市と松原市の境界であるかのように見えるが、地図で確認すれば、各所で大阪市域が大和川の南へ突出している。大和川の南岸に接した阿麻美許曾神社の境内も川の南へ張り出した大阪市域に入る。神社は河内国丹比郡の式内社であり、素盞鳴命・天児屋根命・事代主命の3柱を祭神とする。古く社地は阿麻岐志の宮と呼ばれていた。阿麻美の名はそれに由来する。

本殿は横に並ぶ妻入りの3棟が一筋の大棟で接続する独特の様式で、阿麻美造りと呼ばれるが、前に文久3年（1863）に建てられた立派な拝殿があるため、正面からは参拝できない。拝殿と前に立つ一對の注連縄石とが美しい構図を作り、樹齢500年ばかりの楠が林立して上空に覆いかぶさる景色は神社の長い歴史を感じさせる。手水舎の東に立つ「行基菩薩安住乃地」碑は行基が当地に留錫したという伝承を顕彰するもので、瓦ぶきの南門は天見山の山号をもつ神宮寺の山門である。

参道はそのまま下高野街道に接続する。下高野街道は四天王寺の南大門に発し、狭山池の東で中高野街道に接続する高野山参詣路であり、阿麻美許曾神社の南1kmばかりで西除川に当たる。その地点で西除川は西へ鋭く屈折するが、これは大和川付け替え工事の際に旧河道が塞がれたため、浅香山近くで水位を合わせて大和川へ排水するための変更である。寛保3年（1743）9月に提出された「城連寺村困窮につき願書」（長谷川正彦氏文書）には大和川付け替えのため城連寺村が田地の大半を奪われ、なおかつ南方からの汚水に悩む窮状を切実に訴えている。大和川の付け替えは八尾方面に綿花生産の益をもたらす反面、松原に甚大な損失を及ぼす結果となった。

西除川の旧河道は天道川と呼ばれた。天道川は西除川の屈折地点から北上し、西へ東へ蛇行しながら矢田方面へ流れていた。その痕跡は衛星写真や2千5百分の1都市計画図にはつきりと確認できる。実は阿麻美許曾神社から本キャンパスまでのコースは、旧河道の中央に通された道を歩ませようと意図して設定したものである。旧河道の跡に城連寺村困窮の歴史を語ることができる。

現在、この付近は阪神高速大和川線の建設工事による宅地の立ち退きが進んでいる。本キャンパスの

北側を東西に走る高速道路は、阪神高速14号松原線の三宅付近の屈折部から西へ伸び、すぐさま地下道となって大和川南岸堤防の下を抜けてゆく計画である。本キャンパスの北側からその側道を通って東へ進めば、屯倉神社の鎮座する旧三宅村へは、ほぼ一直線で到達できるが、その沿線は地上の文化財もなく、退屈である。ここは本キャンパスから南へ進み、天美駅前東商店街を通る道を歩んでもらう。やや遠回りにはなるが、直線的な自動車道を、排気ガスを吸いながら延々と歩く不快感を味わわなくて済む。

商店街を抜け、三宅へ向かう道は田畑に挟まれた旧道であるが、不思議と曲がっていない。これは奈良時代に敷かれた条里を留める道である。条里制では60歩を1町（約109m）として、1町四方の正方形の土地を坪と呼んだ。縦横に6坪ずつを並べた大きな正方形を里と呼ぶ。里の1辺は約650mである。松原市にはこのような条里による土地区画が良好に残っており、阪南大学両キャンパスの周辺に碁盤の目のような道が通っているのは、その名残である。このように三宅までの旧道で河内の条里を語ることができる。

松原市域の25%は市街化調整区域で、南キャンパスの周辺にも田畑が多く残っている。さきほどの旧道から南に広がる田畑の風景を眺めると、畦が段になり、耕作面に高低差があることがわかる。南から北へ緩やかに下る傾斜した土地に水田が営まれてきたのである。三宅の方向を眺めると、田畑よりも一段高い土地の上に家々が並んでいることがわかる。羽曳野丘陵の末端をなす瓜破台地につながる中位断丘の上に三宅の旧村は広がっているのである。そういう地形を目で確かめながら旧家の並ぶ三宅の集落を進むと、その東南隅に屯倉神社の境内がある。

屯倉神社の名は古代の河内に置かれた皇家の領地と穀物倉庫に由来する。『日本書紀』皇極元年（642年）5月5日の条に天皇が「河内国の依網（よさみ）の屯倉」の前に百済の王子を呼んで射猟を観覧したことが記される。飛鳥時代に敷かれた大津道（長尾街道）からさほど離れていない当地は、直轄領の穀倉を設置するにふさわしい土地である。それほど高くはないが、東西の田地に比べると風通しのよい微高地の上に穀倉が建てられた可能性は十分にある。

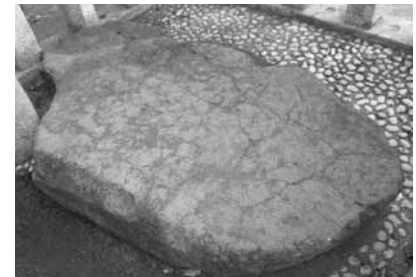
屯倉神社は菅原道真・須佐之男命・品陀別命の3柱を祭神とする。道真が大宰府に赴く際、道明寺にいる伯母の覚寿尼に会ったのち、この境内にある神形石（かみがたいし）に腰をかけたという伝説も残る。神形石は長さ180cmばかりの扁平な板石で、面取りもある。三宅村にあった古墳の石室天井石であるとも言われる。三宅集落の中には古墳の痕跡と思える区画もある。屯倉神社はもともと「穂日の社」と呼ばれ、菅原家（土師氏）の祖先神である天穂日命を祭神としていた。古市古墳群造営の技術者集団である土師氏がこの地域にいくつもの集落を構えていたのだろう。当社に道真が立ち寄ったという伝説は荒唐無稽の話ではない。屯倉神社の南には菖蒲園を整備した溝が東西に走る。これは中近世に設けられた陣屋の堀跡であるらしい。

阿保神社へ南下する道は中高野街道で、歩くだけで歴史を辿ることになる。高野街道は河内長野から高野山へ通じる参詣道である。大阪平野の各方面から河内長野へ向かう道は、東高野街道・中高野街道・下高野街道・西高野街道などと呼ばれ、そのうち中高野街道は平野の杭全神社のあたりから発し、三宅村を通り、狭山池の方面へ南下してゆく街道である。

中高野街道が屯倉神社境内のすぐ西を通って、河内松原駅へ向かう途中に阿保神社の鎮座する阿保の集落がある。阿保は「あお」が正式の読み方であるが、地元では「あぼ」「あほ」とも呼ばれる。中高



阿麻美許曾神社のクス



屯倉神社の神形石

野街道が大阪府道187号線と交差する地点から50m ばかり東に進めば、龍光寺という町寺の道から阿保の旧集落に入ってゆける。住宅街の細い道を左に折れ、右に折れて進めば、西徳寺に突き当たる。寺の南に阿保神社の境内が接するが、神宮寺ではなく、蓮如に帰依した本願寺僧の道入が永正3年（1506）に創建した道場に始まる浄土真宗の寺院である。西徳寺や阿保神社の付近は路地が複雑に入り組み、旧村の風情を留める。三宅とともに河内の原風景を思わせるスポットである。

阿保神社の祭神も菅原道真である。屯倉神社と同様、大宰府へ赴任する際、この地に道真が立ち寄ったという。村名と社名は境内摂社に祀られる阿保親王に由来する。阿保親王は平城天皇の長子であり、在原業平の父としても知られる。葉子の変に連座して大宰府に左遷されたが、後に許されて帰京した。奈良時代の官人である葛井道依の娘、藤子を母にもつ阿保親王は当地に別邸を構えていたらしい。葛井氏は百済王族の家系で、応神天皇の時代に渡来した。西安で墓誌が発見されて話題となった井真成も一説にこの一族であるという。葛井寺はその氏寺である。阿保親王も母方の氏族である葛井氏との関わりで、この地に別荘を構えたことは十分に想像できる。阿保神社の本殿横には幹周りが4.5m ばかりあるクスの巨木が大きな枝を広げている。樹齢1100年とも推定される古木は、太い根を境内の地面にしっかりと広げていて力強い。巨樹を訪ねる企画に組み込みたいみごとな一木である。

阿保集落の南に広がる海泉池（かいずみいけ）は一角が埋め立てられて松原市民道夢館というドーム形の生涯学習施設が建てられている。そのゲート横に池の説明板があつて、「海泉池は、丹比野の中位段丘上に開析された谷筋を堰き止めた溜池で、立部の阿湯戸池から上の池・今池・小治ヶ池・樋野ヶ池・寺池・稚児ヶ池と不整形な池が一行に並んで海泉池となる群池であり、不整形な池は、整形の池より古い時代の築造」であると記される。中位段丘上には南から北へのびて口を開ける開析谷（底が平坦な谷）が幾筋か走り、そこを堰きとめて貯水池を造っている。そのため、池は開析谷の自然地形に合わせて不整形となり、いくつもの池が谷筋に沿って並ぶことになった。

阿湯戸池から海泉池に至る8面の池のうち、遺憾にも埋め立てられてしまった稚児ヶ池は、古くは親王池と言い、阿保親王の造らせた貯水池であると伝えられる。さきほどの案内板の横に「満水石」の字が刻まれた石柱が立っている。これは海泉池の北堤に立てられていた分量石で、阿保や屯倉への用水の配分を量る標尺柱であった。池水の分配は死活の問題であるため、分量石の見究めは幾人かの立会人が公平に判断した。満水石は近世水利権の歴史を残す遺産である。

海泉池の土手から南へ下る細い道は200m ばかりで中高野街道につながり、そのまま長尾街道との交差点に至る。往時、この辻には明治・大正期に「茶屋竹」という、敷地1000坪程度の大きな旅館があつて、阿保茶屋（あぼんちゃや／あおんちゃや）の名で親しまれていた。その跡碑は交差点の西南角にある明治39年5月所建の日露戦没記念碑のすぐ西に建てられている。街道筋の活況を感じさせる遺産である。

柴籬神社は河内松原駅の南東400m にある。駅からは「ゆめニティまつばら」のビルを通って南側の車道に出るのが近道である。その立体駐車場の建設にともなう事前調査で確認されたのが丹比大溝であった。幅10m、深さ3mの断面V字形の大溝が東西方向に一筋走っている状況が確認された。地形をたどれば、西方の松原中学校の北側を通り、西除川へと続いていることが推定できる。東へは寺池を通り、東除川へ続いてゆく。地勢から見ると、丹比野を横断する水路を通し、東除川の水を西除川へ流していたものと考えられる。もちろん、その目的は北方の田畑への灌漑であるが、水は古墳の周濠にも送られていたようである。戦後に撮影された米軍の航空写真を見ると、ゆめニティまつばらから東方の樋野ヶ池までの間に馬蹄形の土地区画がある。全長200mの前方後円墳が削平されたあとの痕跡であろう。山ノ内古墳跡と呼ばれて、いまだ明確な関連遺構は検出されていないが、大塚山古墳に並ぶ大型前方後



阿保神社のクス老樹

円墳の残滓である可能性は高い。大溝は周濠の北西隅に接しており、周濠に水が供給されたか、あるいは周濠の水が大溝に排出されたかのいずれかであろう。また、ちょうど周濠と大溝との接続地点から南西に向けてもう一筋の大溝が通され、松原小学校の北側へ続いてゆく。ゆめニティまつばらの南に東西方向の車道と斜めに交差する空き地があるのがその跡地である。

地図を睨んでいて、さらに面白いのは、柴籬神社が山ノ内古墳跡の南に隣接していることである。神社には古墳時代の祭祀と密接な関係をもつものがあるが、柴籬神社と山ノ内古墳跡はそのような事例に数えることができるかも知れない。社伝によれば、柴籬神社は反正天皇の丹比柴籬宮跡に創建された神社であるという。近くには墳丘長335mの前方後円墳である大塚山古墳もある。大塚山古墳には横穴式石室が内蔵されているらしく、墳丘の平面形状からも後期古墳と考えられる。その規模は全国で第5位を誇り、後期古墳としては最大である。そのことから雄略天皇陵に比定する向きもある。いずれにせよ、柴籬神社の付近が大王墓をもつ特異な地域であったことは間違いない。

柴籬神社の正殿には多遲比瑞齒別命（反正天皇）、相殿には菅原道真と依網宿禰が祀られる。反正天皇が美しく輝く歯であったことから、歯の神として崇められ、歯神社も祀られる。近年、歯を触って歯の健康を祈る石造の歯磨き面が建てられた。境内の前半部には広場山観念寺という神宮寺があったが、廃仏毀釈で廃寺となった。神門はその山門である。

柴籬神社から次の布忍神社までの距離は約2.8kmであり、普通の歩行で50分ばかりかかる。途中の高見の里には古い町屋も残るが、さすがに距離が長い。そこで河内松原駅に戻り、近鉄南大阪線の布忍駅まで2駅の距離を短縮する。布忍駅から北西の方向に歩き、細い路地を抜けると、西除川に突き当たる。その手前に長屋門のある屋敷や古木もあって、往時の風情が感じられる。

布忍神社の東に架かる朱色の宮橋の東詰には融通念仏宗の布忍山大林寺がある。本堂にまつられる木造十一面観音菩薩立像は西除川の西岸にあった永興寺（ようこうじ）という大寺から移されたものである。高さ170cmの一木造りで、平安時代後期の作風を留めているという。大林寺所蔵の「布忍山永興寺略縁起」によれば、永興寺は平安時代後期の寛治3年（1069）に永興律師が創建し、鎌倉時代に西大寺の叡尊が中興した寺院であるという。通称「布忍寺」といい、その塔頭である東之坊が布忍寺の名を伝えている。

布忍神社は西除川の西岸に接し、永興寺跡の北東に鎮座する。祭神は速須佐男之尊・八重事代主之尊・武甕槌雄之尊の3柱である。布忍寺東之坊の縁起によると、嵯峨天皇の弘仁5年（814）に空海が布忍寺の伽藍を再建し、布忍7ヶ村の産土神として牛頭天王を祀る鎮守社を建てたという。社伝によると、阿麻美許曾神社のある天見丘から祭神を迎えたことが記され、そのとき境内に白布を敷いて迎えたことが布忍の由来であるとする。一間社流造りの本殿は江戸時代の寛文期に創建されたもので、大阪府指定有形文化財に指定されている。本殿にかかる「布忍宮」の扁額は黄檗宗の万福寺に招かれた中国僧高泉性敦の筆になる。

我堂八幡宮までは布忍神社の大鳥居から北西へ進み、高木や我堂の旧集落を抜けてゆく道をたどる。古い民家や折れ曲がった路地の風景を楽しめるコースである。途中で手洗いのある北



柴籬神社の歯磨き面



布忍神社の大鳥居

新町大池公園があつて、休憩をとることができる。

我堂八幡宮は我堂旧集落の東部にある。延享元年（1744）の両我堂村明細帳には「十五社明神」の名が見える。百舌鳥八幡宮から勧請して祀った品陀別命を祭神とし、「厄除さん」の名で親しまれている。廃仏毀釈で廃寺となったが、江戸時代には境内に黄檗宗の神宮寺があつた。我堂の名は神宮寺に因むものであるとされるが、詳細は不明である。境内には民俗資料である6つの力石が並べられている。いずれも高さ50cm前後、横幅40cm前後の卵形をしており、正面に「明治石」「金剛石」「八幡石」「龍王石」「力石」の字が刻まれる。「力石」と刻まれた石だけは一对となり、「東連中」「西連中」の字が小文字で刻まれている。「東連中」の小文字は「明治石」「金剛石」，「西連中」の小文字は「八幡石」「龍王石」にも見える。往時、我堂の集落は東西に分かれ、それぞれの若人衆が3つずつの力石を持ち上げて力を競ったのだらう。我堂八幡宮の力石が作られた時代は明治初年であり、行事は戦前まで続いた。



我堂八幡宮の力石

我堂八幡宮から北上する道の口に重厚な山門をもつ善正寺がある。我堂八幡宮神宮寺の本尊であつた阿弥陀如来坐像（像高61.5cm）が客仏としてまつられている。善正寺は浄土真宗大谷派の寺院で、蓮如直筆の「六字名号」、親鸞・顕如の画像が寺宝として伝えられる。

善正寺の東築地に沿った道を北上し、西除川に架かる歩道橋を渡れば、天美西公園に着く。この公園も児童の遊び場として整備され、手洗いもある。公園の西に隣接する今池水みらいセンターは東除川・西除川流域の汚水を処理して大和川に流す浄水施設であり、この建設時に難波大道の跡が発見された。今池遺跡という。難波大道は推古天皇21年（613）に難波から真南に通された大路であり、遺跡からは側溝のついた路面幅17mの道が検出されている。

面白いことに、平安時代に大道が廃絶されたとき、路面の中央に中央分離帯のような形で畦が通された。このことから次のような事実がわかる。まずは真北を測定して難波宮から真南に軸線を引かれた。それを道路の中心線として難波大道が敷設された。大道の中心線を基準線として河内に条里が設定された。そして、大道が農地化した際、条里に合わせて道路の中心線に畦が通された。それらはすべて正確な測量にもとづく工事であつた。驚くべき古代の技術を天美西公園から西を眺めて語ることができるのである。

天美西公園で小休止をとったのち、さらに北上すれば、油上・芝の旧集落に入り、集落から北東に進むと、出発地点である阿麻美許曾神社にいたる。その途中は地下道となる大和川線の工事によって切断されているが、2014年の開通後は地上をどう整備するのだろうか。住宅地を交通渋滞緩和の犠牲にするのではなく、願わくば、市民が憩える環境を整えていただきたいところである。

以上が阿麻美許曾神社を出て、屯倉神社・阿保神社・柴籬神社・布忍神社・我堂八幡宮の5社を巡り、再び同社に戻るモデルコースである。道中にはさまざまな時代のさまざまな文化財が点在する。旧地形の痕跡も観察眼の持ちようで楽しめる。この研究ノートでは開運松原六社参りが観光に資する可能性を探った。次に行うべきことは、周辺の文化遺産に対するより緻密な調査と巡拝路の環境整備に向けての提言であらう。「地域社会の要望と課題に応え、その発展に貢献する」目標を高らかに掲げた阪南大学が全学をあげて六社参りの発展を支えてゆくことを願う次第である。

（2011年11月25日掲載決定）



Page:9